

中国星座の恒星名

お土産でもらった星座早見

数年前、知人が台湾旅行へ行ったお土産として、星座早見盤をプレゼントしてくれました(写真1)。長らく本棚に入れていたのですが、先日久しぶりに見つけて、しばし手に取って見えました。見慣れた星座が中国語名で書かれていたり、カノープスが高度10度以上に見えることがわかったりと、珍しい内容に見ていて楽しくなります。

そんな中、気づいたのが一等星などの明るい恒星の名前です。写真2は冬の星座部分ですが、オリオン座のベテルギウスは「参宿四」、リゲルは「参宿七」、おおいぬ座のシリウスは「天狼」、りゅうこつ座のカノープスは「老人」とあります。これらは中国の星座体系による伝統的な名称で、日本でも江戸時代まで使われていました。日本でも、おうし座のプレアデス星団を「すばる」などと呼ぶ独自の伝統的名称がありますが、天文学者たちは研究の際に中国体系の名称を使っていました。

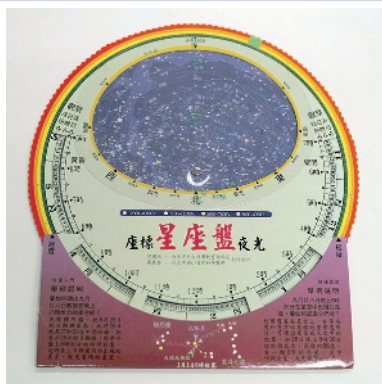


写真1:星座早見盤全景



写真2:描かれた冬の星々

中国の星座体系と恒星名

かつて中国では独自の星座体系を使っていました。その歴史は古く、少なくとも今から2,500年以上まで遡ることができます。日本でも古代から江戸時代の終わりまで使用されていて、例えば奈良県の高松塚古墳やキトラ古墳の石室に描かれた星々も中国の星座体系によるものです。

中国星座の数は283あり、中には一つの恒星だけで作られた星座も存在します。例えば、上記のシリウスとカノープスがこれに該当し、それぞれ単独で「狼37(天狼とも)」、「老人」という星座になっています。

一方、複数の星で作られている星座の場合、それぞれの恒星はどう表すのでしょうか。現行の星座体系ですと、それぞれの星座の中で α 、 β 、 γ …といったギリシア文字を付ける「バイエル符号」がおなじみですが、中国の星座体系では、「一、二、三…」という数字を付けて表します。写真2のベテルギウスとリゲルは、両方とも中国星座の「参」(二十八宿の一つなので「参宿」と呼びます)の星で、それぞれ参宿の第四番、第七番の星ということになります。

他にも、しし座けんえんのレグルスは「軒轅十四」、おとめ座しんのスピカは「角宿一」、さそり座のアンタレスは「心宿二」と表記されています。

江戸時代の星図にも

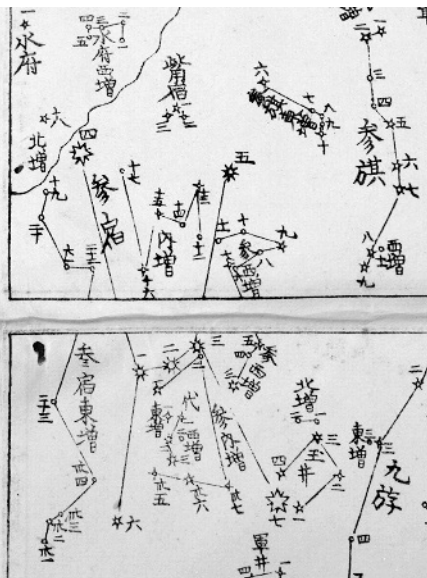


写真3:『方円星図』の参宿付近

次は江戸時代の日本の星図を見てみましょう。写真3は1826(文政9)年に出版された石坂常堅著『方円星図』という星図の参宿付近です。参宿はオリオンの主要部分(三ツ星とその周囲の四つの星)を合わせた七つの星で構成され、ベテルギウスには四、リゲルには七の番号が記されていて、星座早見盤の番号と同じです。ちなみに、オリオンの三ツ星は、東側から一、二、三と名付けられています。

中国星座での各恒星の番号については、古い時代にはきっちりと決められていなかったという説があります。一方で『方円星図』は、中国の清代に作られた星表『欽定儀象考成』(1752年)をベースに作られており、各恒星の名称もそれに倣っています。この『儀象考成』は、西洋天文学に基づいた近代的な観測によるデータが記

載された精密な星表で、日本の天文暦学にも影響を与えたエポックメイキング的な書物ですから、そこに記載された番号が今に引き継がれていると考えられます。

お土産でもらった一枚の星座早見盤から、江戸時代までショートトリップしてみました。星座早見盤は世界各地で作られていますから、他にも色々見てみると、居ながらにして時と場所を超えた旅行が楽しめそうです。

嘉数 次人(科学館学芸員)